

叔（杉原定利の子）を娶る。

○永祿五年（二十六才）士分下取立てらる。

○永祿九年（三十才）足輕七將に在る。

○元禄元年（三十四才）甚女（南殿といふ）に男子を
まませた。（石松丸と名付く。）

○天正元年（三十七才）長浜城主（十二万石）と在る。
羽柴の姓を名乗る。

○天正四年（四十才）石松丸羽柴秀勝死す。（本光朝
覚居士）長浜の妙法寺に葬る。

秀吉が信長に又とめられ小入頭（仲間）の長に成つた
の以永祿三年、桶狭間の戦があつた年である。永祿元年
二年当時の秀吉はまをせられと名をされ仲間、小者で
あつた。一生懸命に走り使ひをし、草履取、鹿ノ掃除主
する奴であつた。とていふ瀬尾小太郎などといふ御士の
女と契るやうな境遇ではなく、まして木下藤吉郎高吉な
どと名乗れる身分ではなかつた。秀吉が正妻のお叔（北
岐所）以外に女に手を出したのは、信長上洛の先手料
として江北に進出（姉川の戦）した元禄元年で、その後
（天正元年）長浜城主になつたとき、女（南殿）を城中に
よび愛妾第一号にした。以上の史実から高政の秀吉庶長
子説は伝承の誤謬であることがわかる。

さてここまで論述してきたものの、高政の系譜につい
ては結論を出せない。それは毛利氏系図が森政次以前と
記録してないからである。

（おわり）

資料考察

佐伯藩の四大井路

—その他、小田井堰頭首で完成まで—

山 本 保
会真・佐田市青山小学校

田植も終りました。先月号で高橋智氏が浜後井路（
本五村）について触れていましたので、私は小田、鬼が
瀬、常盤、高島の各井路（井堰）その他について一考察
を試みたいと思ひます。
まず、考察の手懸かりとして歴史年表を提示します。

年号	西曆	事	項
元禄	四一六九一	五代毛利高久の時、上野村小田井路完成。	
宝永	三一七〇六	六代高慶の時、中野村鬼ヶ瀬井路を築く。	
享保	六一七二一	小林九左衛門總奉行となり、五所明神社再建。	
〃	七一七二二	小林九左衛門死す。	
〃	一七一七三	虫害甚しく、大阪より米一八〇石を買入れる。	
〃	一八一七三三	浜後井路完工。	
〃	一九一七三四	江戸に米一撥。	
寛保	二一七四二	幕府甘藷栽培を奨励す。	
天明	三一七六六	女島沖洲と相襲し、水田四十二町歩余を得。	
〃	四一七六七	二年より明和八年迄早魃、飢饉続出。	
〃	八一七七一	八代毛利高標の時、久部村に堰と開設す。	
天明	元一七八一	母子大洪水あり、疫癘流行し、夏飢饉となる。	
〃	三一七八三	この年より天明八年迄大飢饉続き、餓死者多し。 （未曾有の凶作、銀羽の死者七万人に達する）	

年号	西暦	事
天明 七	一七八九	夏旱魃、土穀実らず、領内大飢饉、 今泉丞甫、米百石を献じ窮民を救う。
寛政 三	一七九一	凶作尚続き、藩政改良難となる。領民に献金せしむ。
	一七九九	五月旱魃、八月大雨洪水。
	一八一〇	飢饉、今泉丞甫、再び米九十石を献ず。
文化 元	一八〇四	秋暴風洪水、六千三百五十石の米被害あり。
文化 九	一八一二	佐伯藩五ヶ村の百姓二校、麻山まで押し寄せる。
	一八一四	常盤井堰着手工。
	一八一五	小野崎堰田圃墾、 常盤井堰完工。
	一八一七	(十代毛利高藩) 常盤井堰完工。
文政 九	一八三二	大里正深矢治右五門、小田井堰改築。
天保 八	一八三三	大塩平八郎の夜。
安政 元	一八五四	佐伯地震。餓死する者多し。
	一八五六	(十代高藩) 古市村鶴木湊(萬島井堰)完工。

右の年表から四つの井堰が誕生した歴史的背景が理解できます。個々について資料を掲げておきましょう。

(一) 小田井路

① 弥生町番匠(旧上野村)に、次のような明治二十三年八月建立の古の石碑があります。

(正面文字)

当兼堰、分水之創業タルヤ元禄四年ノ頃也。田藩士小林九左五門十人、同益之為メ二期ノ河水ニ横堰ヲ掛ケ溝渠ニ分流シ百用ニ灌漑セント、該時ノ大里正深矢治右五門ニ譲リ、共ニ千年有苦ヲ忍ンデ遂ニ竣工セリ。乃十嗣國ハ変ジテ良田トナリ、千四ハ自在ニ水利ヲ得テ其ノ功勳カラズ。是ヨリ年々歳々

修繕ヲ為スト雖モ資本乏シキニ依リ、数十年前後ニ至リテ大故トナリ、夏季干魃ノ節ハ全村ノ疾苦甚ク多シ。

大里正深矢治左五門種々ニ心ヲ尽ス、末エ文政九年(十代毛利高藩)ノ頃自ラ率先シテ事ヲ廣敷弥三共ニ謀ジ、横堰ヲ悉ク灰石ノ切石ニテ置キ、年々修繕ノ冗費ヲ省キ、堅固一構ヘシニ水勢以前ニ倍シ、更ニ干損ノ憂ナキニ至リシモ物換星移ルニ從ヒ河川ノ水路変換シ、年々ノ修繕又多分ノ費金ヲ要スルニ至ル。

竹田村ニ移ル時ハ、村里ノ疾苦夥多ナリト鶴岡村有志ノ各員昔年ノ苦勞ト年々ノ費金トヲ顧ミ、憤發斷決シテ新ニ石置ヲ設築シ充分堅固ノ横堰トセリ。

嗚呼、鶴岡ノ幸福何ヲ以テ之レニ加エンヤ。一ニ美談ト云フベシ。後人斯ノ美譽ヲ賞シ斯ノ志ヲ継ガン事ヲ冀望ス。依テ一表ヲ掲ゲ以テ其事実ヲ記ス。

明治二十三年八月 日

河水滔々流不尽 籍田云々禾無荒

記者 森 矢 時 雍

(右碑左側面文字)

明治二十三年井堰大修理ニ付キ、鶴岡村ニ談判相調費用ヲ分担ス。其ノ証トシテ上野村長、議員、大里小田組社長世話係井守等記名ス。

◎ また、左に昭和三十九年十月十五日建立の新い石碑が並んで立っています。

(正面文字)

小田頭首工改築記念碑

（背面文字）

佐伯市長 出納菊二郎

当横堰は、佐伯藩第五代の藩主毛利駿河守高久の家臣小林九左衛門が、旧鶴岡地方に広い耕地がありながら、灌水不便のため水門極めて少ない、耕地を水田に改良せんと日夕その方法を講じたけれど、到底自力で経営することが困難なので、時々の野村大庄屋深沢治左衛門時真にこれを囑った。時真大いに協賛し、藩主又夫役を領内各村に命じ、小林九左衛門、深沢治左衛門時真の兩人にこれを管理せしめた。兩人丈いに苦心、これより上流二十米の地点に横堰を築き、溝渠に分流し、百数十町歩に灌漑するを千苦万苦の末、元禄四年三月十五日開鑿遂に竣功し、その後継深沢治左衛門時真によって横堰をことごとく灰石置とする大改修をなしたるも、星霜をへるに従い年々歳々起る災害のため、横堰は決壊し、その都度莫大の支役金品をついにし、補修を怠らなかつたが、昭和三十八年八月八日洪水のため五十七米決壊後復旧至難の大災害をこうむつた。

加うるに河川の流脈に変動を生じたため、横堰移改築の議が起り、時の小田井堰土地改良区理事長高野甚佑以下役員等つせんして地方有志にばかり、共に推進母体となつて努力した。しかして時の佐伯市長出納菊二郎大いにこれに賛し、佐伯市 業主団として委託県営事業のもとに、大分市鶴崎高山記念工業株式会社によつて、昭和三十九年一月七日着工、同年九月十日竣工。延長二百五米総工費五千六百七十三万円（国庫補助四千二百四十六千円）、（大分県

補助百五十八万円）、（建設省五百四十七万九千円）、（佐伯市七百七十五千円）という龐大な数字にあがる工事費と、鋼矢板四米打ち込み、或以油圧自動転倒機取り付けという県下に例のない最も近代的工作と大分県佐伯耕地事務所指導のもとに遂に完工した。

かくて四千四百十三米の水路は満水して力強く水は流れる。されど永く流れるのでおろろ番匠川の清流とともに心置きなく増産に励むことの出来ることを想うと実に感慨無量である。時勢は移つて貨幣価値の変動があつたとしても、五千六百余万円の巨費を投じた延長二百五米の近代的な横堰を眺める時、將に壯觀そのものである。

本移改築の難易世は昔の比におらずといへ、調停官庁並に關係地区民の熱誠努力は誠に偉大であり、昭和三十九年七月六日記念碑建設委員会を設立、委員長伊達想蔵以下委員の努力によつて、工事二十五万八千円で碑を立て、同年十月十五日目出度く竣工式と同時に記念碑の除幕式を挙行せり。ここに其の碑文を記して後代にのこす。

記者 鶴岡支所長 山本 信夫

◎佐伯市星宮、金欄橋近くの小田水路沿ひにも、次の石碑が建てられています。

（正面文字）

小田水路改修記念碑

建設大臣 村上 勇

（背面文字）

佐伯市を西に五キロ半、南海部郡生村（^{（生野町）}）大字小田付近に流れる番匠川に横堰を築き、これより水路を穿

ち、佐伯市大字鶴望に至る延長四千四百余米の水路は、元禄四年、時の大里正源次治左衛門時真が開き、その後継者源次治左衛門時時によつて大改修をなしたるも、星霜を経るに従い、年々歳々起る災害のため、横堰及び堤防は、決壊し漏水甚だしく、各所に灌水不便を感じ、佐伯市唯一の恵まれ右耕地をもちながる、充分増産に役立たせることが出来ず、農民はとしく嘆き悲しんでいたが、しかして地方有志の間に大改修の議が起り、時の佐伯市鶴岡支所長高野保男、萬農の士戸坂彦蔵、高野甚作等卒先これをも唱導され、農民またよくつけきし、先人の遺業を継承して、永久施設の横堰補修と水路の三方コンクリート左右みとする大改修工事に着手した。

昭和二十七年九月十五日小田井堰土地改良局が設置され、昭和二十八年一月着工、昭和三十三年三月竣工、延長四千四百十三米、総工費千三百八十四万四千円、国庫補助五百五十三万四千円、労務従人員一万五千五百七十五人と云う工事であつたが、灌漑面積百十町歩五百三名に及ぶ関係農民自ら施行に当り、国庫補助をとおかき、県市当局の指導と佐伯市鶴岡支所と事務所として、職員また熱誠努力、事務指導よろしきを得、理事長以下役員は寝食を忘れて政策に専念した偉大な犠牲的精神と関係農民の粒々辛苦の協力によつて、遂にこの難事業が竣成した。

かくて強く水は流れる濁水した香五川の清流ともにも、心を置きなく増産に励むことと出来ることとを想はば、実に感慨無量である。

偉大なり、千万の巨費を投じ右延長四千四百米余、辛苦のあとを眺める時、將に壯觀そのものである。昭和三十五年四月十三日、百花爛漫のもと「今年し

も豊年、穂に穂が咲いて」と祝言とあげ、自由度く記念碑の除幕式と挙行した。

ここに記念碑建設におき、事業の概要を記して後世に残す。

(一) 鬼が瀬井路

六代毛利和泉守高慶の時、小田井堰を作つた土木奉行小林九左衛門が築いて、上野村百四十町余りが、その恩恵に浴しました。

彼が墓は瀬谷寺(佐伯市)にあり、又廟へ通称赤堂さん(上野村)現在弥生町(西蓮寺)におつて、地域の人人に親しまれています。彼は農民の大恩人といつてよいでしょう。

(二) 常磐井路

弥生町立切畑小学校の校庭に次のような石碑が立てられています。(昭和二十四年建立)

(正面文字)
常磐井路 耕地整理記念碑

大分県知事 綱田徳壽

(裏面文字)

香五川の清流に沿つて、文化十年、時の大庄屋松尾藤左衛門が開鑿した延々一八〇〇米の水路がある。南海部郡唯一の平坦地切畑村の大部分の町圃は、これにより灌漑されておるも、何分幹支線水路も井堰も不完全な爲、恵まれ右耕地も十分増産に役立たせることができない。

そこで当時、県会議員平岡京佑發起の下に、昭和八

年常磐井路耕地整理組合を設立し、一応工事は完成した。

處が無情にも、昭和十八年の大暴風雨は、番匠川の堤防を決壊し、濁流は滔々と流入し、七十町歩の耕地は一瞬にして泥用と化した。その翌年も亦その翌年も、この地に雨災害をもちろした。

組合員は泣いても泣ききれなく、呆然自失するばかりであつた。然し斯のたつたのつれ、農家の本分を蘇し克く蹴起し、空襲下にあつて工事三十三万坪を授け、農道新設六五三〇町、水路三方張五七四一町と区画整理を完成したけれども、幹線水路が番匠川に沿つておる為、水害の度に被覆し、莫大な維持費を要する為で、昭和二十一年取り入れ口と起点として三角形の一辺に因つて、破天荒ともいふべき、隧道開鑿に着手した。

工事費百九十四万坪、長さ五〇三米、当時としては費用や機械化において稀に見るものであつたが、果の指導と請負業者星野工業株式会社の犠牲的精神と地元協力のよつて、翌年、流石の難工事しん力と機軸力に任せくれ久しい夢であつた希望の隧道開鑿を完成させし。

鏡いて、隧道下の水路の改修を完成するなど、組合員の増産意欲は、常に困難に堪え遂に不可能と可能としし。今日我々が、心おきなく増産に励むことのできることと考えりと実に感慨無量である。

昭和二十四年には、土地改良法が制定されたので、常磐井路耕地組合を改組し、常磐井路土地改良区とした。茲に記念碑建設に当たり事業の概要を記録し、後世に残す。

(古例百文字)

自昭和十九年至昭和二十三年、事業費五百拾八万五千円、補助金二百五十九万八千円。総反別七拾八町三反五報歩。組合員二百二名。

(四) 高 島 井 路

高島部落の番匠川沿いに、次々とう有石の祠(日こら)がた左ずんでいます。

(刻みこられてゐる文字)

鶴木水神社

身政三辰齋舎八月報且建立之

久部村地目付 常左止門、宇右五門

長瀬村地目付 文藏

市福所村石切 初右五門、長右五門

古市村大庄屋並 江藤又左衛門

久部村大庄屋並 雪太郎

長瀬村庄屋 権六

古市村小庄屋 源五郎 増兵衛

久部村小庄屋 四郎右五門

古市村地目付 佐吉 平兵衛

田島新平以貫
松下直太重胤

集計して及ますと、古市村大庄屋一人、小庄屋二人、地目付二人、(以上五人)

長瀬村庄屋一人、地目付一人、(以上二人)

久部村大庄屋一人、小庄屋一人、地目付二人、(以上四人)

合計十一人が担当してゐます。

築造の責任者は、田嶋新平以貫、松下直太重胤と考

えられず。(二十九町止段の田かゝるおいました。)

(五) その他(久野村)

佐伯市久部(旧上堅田村)に三ツノ堤(通称橋公園)が
あつて、そこに次のように石碑が立ちます。明治四
十四年建立。

(正副文字)

耕地整理碑

我輩南上堅田村大字池田字久部、古来乏水利。明和
八年鑿初清六池、浚田二町余。文化十五年又設築一
大池於清六、東西四十間、南北九十間、面積一町二
段、可流田二十一町余、三池之利既頗豐矣。

然積年之久地目、或或換田亦不少、至皆用水之不洽。
明治三十九年有志相謀、增築清六池之堤、加高六尺。
泉郡村補助金於是水利大成、後愷也。雖然此田平町
況坦、無由排患水且降雨少畦路運搬久便。當此特官
有耕地整理之獎勵、乃有志者協議、以三十七町五段
一整理區。

四十三至八月起工、翌年六月竣工。工費凡金四千五
百餘圓、泉郡村之補助金五百餘圓。整理後三十八町
七段、其増補一町二段、且排水排除、畦路交通齊得
其宜。加之弊濕之地為良田、生産加十分二、是皆耕
地整理之余沢也。

呼嗚嗚無三池設、何以完流澆之利、若無此整理、
則能活用其水利哉。古今相藉以全一地方之民福、且
此美譽、寧先諸村不復贖哉。村氏之喜可知、使整理
委員乞余作碑文。蓋該村多屬余耆櫛、固不辭而記
此且銘曰

井田之家 堀岡新治 溜池之制 聖徳所示
古開厥名 今貝厥利 畦畝井然 澆溉湛菜
阡陌過梁 萬年春碇 公利莫窮 民福何已
噫斯一拳 率宅養美 子孫雲仍 勿忽修理
惟時明治四十四年一月二十日

大階部 小栗布岳 撰
石工 岸崎 十郎 書 併 刻

個々について解説は省略いたします。その代りに
前述の含蓄ある石碑文を充分味読していただきたいと思
います。(但し句讀点、段落などは、おとし自身に補綴
で付けたした)先人の業績を回顧いたしませう。

元禄四年、小田井堰(鶴岡村)の落成十五年後に鬼が
瀬井堰(上野村)が生まれました。それから百十一年後
に常磐井堰(切畑村)が築かれ、更に三十九年後に高島
井堰(古市村)が完成しました。

小田井堰から高島井堰ができておけるまで、百六十五年
の年月を要し、それから百十三年の歳月が流れて今日に
立ちいたっています。その間、血と汗を流して改革工事が
どこに立っていることが理解できます。

過去、現在、未来につながる四井堰は、佐伯郷土史
にとつて特筆すべき事項です。農民とは切つても切れ
ない相関関係にあります。

四井堰は、農民の生活の知恵より生まれたものであ
り、また、農民の精神的な結束への重要な役割を果たし
ているといつても過言ではないう。

(六月二十四日記す)

つきせいのこころも深く振いて

岩井の水は世々にながれ出(副谷長照)